

辻 和之先生の

健康コーナー



肝の病証と治療

後編 虚証編

前回は、肝の病証の「実証」についてお話ししましたが、今回は、「虚証」について説明いたします。

②虚証

虚証には、(A)津液や血の不足と(B)陽気の不足に分けられます。

(A)津液や血の不足

I 肝血虚

全身を栄養する肝血が不足する病態で、滋養作用(栄養を与える作用)が低下し、それぞれの部位での機能低下を引き起こします。そのため、それぞれの障害部位に対する治療法も異なります。症候としては、顔色が蒼白となり、舌が淡白になります。症状は、肝の関わる部

位に対応して、視覚障害、筋肉障害、髪、皮膚、爪の異常がみられます。

(a)【肝血が不足して、筋肉や皮膚、髪の毛の栄養を与えられなくなった場合】

手足がしびれたり、筋力が低下したり、つりやすくなったりします。皮膚が乾燥したり、髪がパサついたり抜けたりします。爪がもろく、変形しやすくなります。

治療としては、煎じ薬では、補肝湯(当帰、白芍、川芎、熟地黄、酸棗仁、麦門冬、木瓜、甘草)を、エキス剤は、四物湯、疏経活血湯、当帰飲子、六味丸、大防風湯を用います。特に手足のシビレ、筋力の低下には、四物湯か十全大補湯に血の巡りをよくする鶏血藤、紅花、桑寄生、続断(マツムシソウ)、牛膝などの生薬

を加えます。

(b)【肝血が不足して目の栄養を与えられなくなった場合】

目が乾燥したり、目がかすんだり、しよぼしよぼしたりします。処方としては、四物湯に枸杞子、菊花、決明子、車前子、菟絲子を加えます。

(c)【肝血が不足して血海が空虚となった場合(肝は、血を貯蔵し、調節する機能を有するので、血海とは、肝の機能である血の貯蔵庫を指しています。】

生理が遅くなったり、経血量が少なくなったりします。処方は、小柴煎(当帰、熟地黄、白芍、山薬、枸杞子、甘草)で、エキス剤としては、六味丸十当帰芍薬散、十全大補湯を用います。

肝血虚からさらに

II 心肝血虚

III 血虚生風

IV 肝陰虚

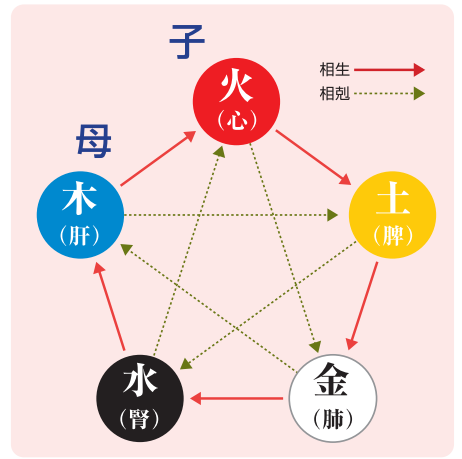
V 肝腎陰虚

に発展することがあります。

II 心肝血虚

肝血虚に心血虚を併せ持つ病態で、心は、血をつかさどり、肝は血を蔵します。五行でいうと、肝は、心の母に当たり、肝血の不足は、心血の不足につながるがあります。

症状は、肝血虚の症状に加えて不眠、多夢、断眠(途中覚醒)、動悸などの症状が加わります。治療は、加味帰脾湯、酸棗仁湯、温経湯を用います。



Ⅲ 血虚生風

肝血虚により筋肉や皮膚への栄養供給が障害されると「風」を生じます。風により痒みや痛み、痙攣を来しますが、痒みの強いときには、当帰飲子、消風散を用います。痙攣、引きつりが強いときには、釣藤散、大防風湯を用います。

Ⅳ 肝陰虚

肝血虚が進み、体全体の陰液が不足すると、相対的に陽気が上に回り、熱の症候(虚熱)がみられます。肝血虚の症状に加えて、胸脇痛、口渴、いらいら、熱感、顔の火照り、頬の紅潮などの熱像がみられます。処方は一貫煎(浜防風、麦門冬、当帰、生地黄、枸杞子、川楝子)、エキ剤は、滋陰降火湯、柴胡清肝湯、温清飲を用います。

Ⅴ 肝腎陰虚

肝血が不足すると、腎の栄養供給が傷害され、腎陰虚(腎陰の不足)を招きます。肝血虚の症候のほかに腎陰虚の症状として腰が痛む、下肢がだるい、歯が抜けやすい、髪が抜けやすいなどの症状を伴います。処方には、左帰丸、左帰飲を用います。耳鳴り、頭痛、目の乾きや視力障害に杞菊地黄丸、エキス製剤では、六味丸十釣藤散を用います。

肝血の不足によって(Ⅱ)心肝血虚から(Ⅴ)肝腎陰虚までの陰血の不足状態に陥るばかりではなく、肝血が不足することにより肝気の

流れも悪くなり、気の巡りが乱れて、肝気鬱結(肝気の流れが渋滞すること)の状態にもなります。気の巡りが悪くなると、血を動かすのに

も悪くなり、血瘀(血の巡りが悪くなる)の状態にもなります。

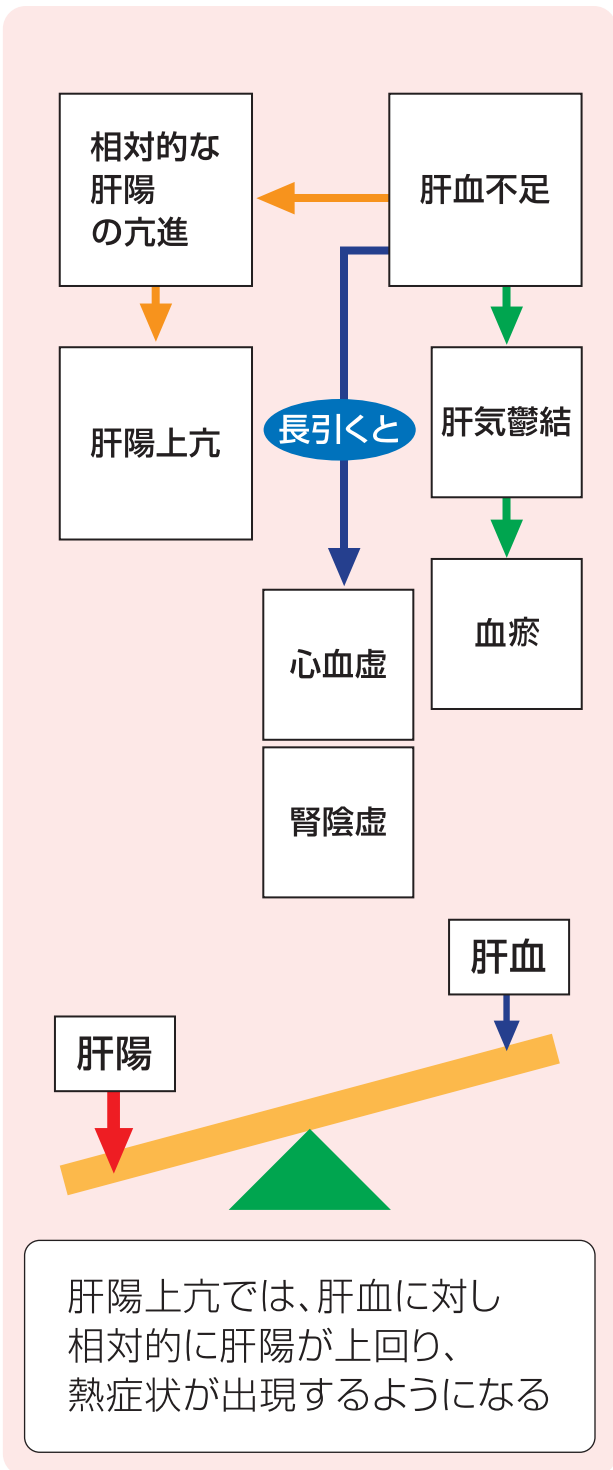
肝血の不足から肝陽が相対的に増し、肝陽上亢になります。肝血虚が長引くと、腎や心にも影響を与えるばかりではなく、気や血の異常を引き起こしますので、主病態が肝血虚であっても2次的に派生する病態についても十分考慮する必要があります。

(B) 陽気の不足 肝陽虚

肝気には、陽としての性質があり、エネルギーを持っていますので、肝気が不足すると、熱の要素としての陽が不足することになり、体内に「寒」を生じます。肝は、特に気の巡りをつかさどる重要な働きをしていますので、気の巡りは、全身の機能と関連していることから、肝陽虚が全身の機能低下をもたらします。

症状としては、手足の冷え、倦怠感、性機能低下、不妊などです。

処方、温経湯や大営煎(当帰、熟地黄、枸杞子、杜仲、牛膝、甘草、肉桂(桂皮))を用います。肝を温め



るこれらの処方に加え、肝気そのものを伸びやかにさせる作用を持つた黄耆が有効です。補中益気湯など黄耆を含む方剤をそれぞれの状況で使い分けます。また加味帰脾湯、甘麦大棗湯など間接的に肝気を引き上げる作用がある心陽（心の陽気）を補うことも有効です。

【肝の特性からみた病態】

正常状態の肝の特性は、「伸びやかさ」であります。したがって「伸びやかさ」の失調が病態把握の基本となります。肝は、自律神経系を円滑に調節する働きがあります。したがって肝気鬱結となって肝の伸

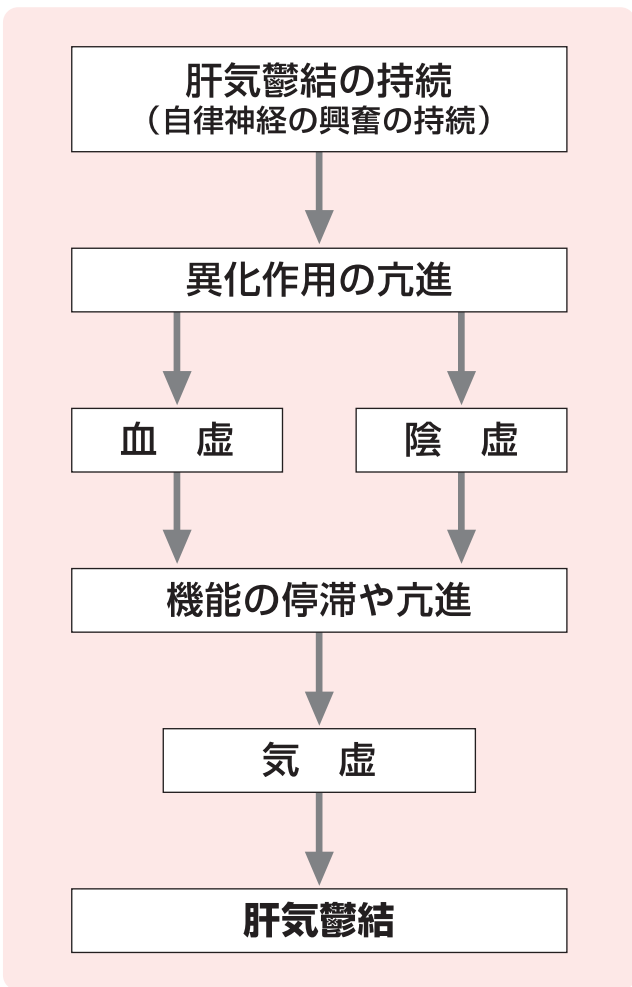
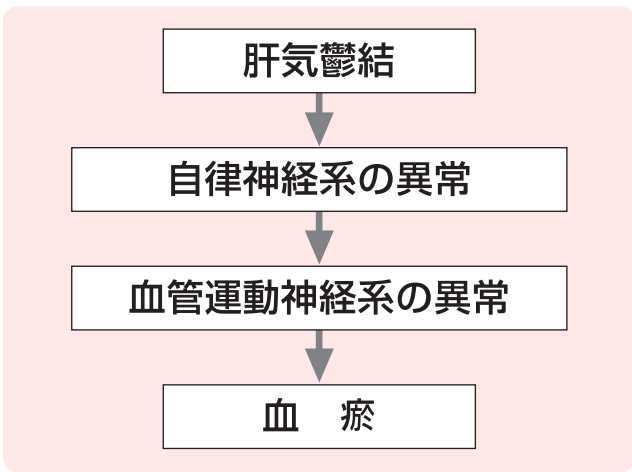
びやかさが損なわれると、自律神経、特に血管運動神経系の異常から血流の停滞すなわち血瘀を伴いやすくなります。

自律神経の興奮の持続により異化作用が亢進し、物質的消耗を生じ、血虚や陰虚を伴いやすくなります。さらに機能の停滞や亢進が持続すると、疲弊に伴って気虚も生じ、元気がなくなります。逆に気虚があると、気が滞りやすくなるため、容易に肝気鬱結になりやすくなります。従って元気がなく抵抗力が低下した気虚のある人は、普通ではストレスにならない外界環境でもストレスになります。たとえ

ば元気であると、気にならない騒音が、体が弱ると耐え難い騒音になります。したがって肝の病態を考える際には、血瘀、血虚、陰虚、気虚の有無について考慮する必要があります。肝の病態で一番多いのは、肝気鬱結です。現代社会は、ストレスが多く、肝を傷害する機会が多いからです。肝気鬱結をきたした二例を提示してみましょう。

【症例】54歳女性の方で、主訴は頭痛、気分がもやもやしてすぐれない、支え感はある。朝起きにくい。のぼせや発汗が気になるという状態でした。特に頭痛と吐き気が一番つら

く、二日横になって寝ていると翌日には改善しますが、何とか通常の生活に戻りたいという希望がありました。肝気鬱結と梅核気（喉元に梅干しの種がつかえた感じ）があると判断し、のぼせから気の上逆があると考え、加味逍遙散を投与し、支え感から半夏厚朴湯を加えました。服用して3日目から気分が良くなり、頭痛がなくなり、朝の目覚めやのぼせも良くなりました。30年来の頭痛と二年前からの更年期症状が、漢方薬を服用して気の巡りをよくしてから、僅か3日で劇的に解消され、患者様は大変喜んでおられました。



プロフィール

昭和26年 北海道江差町に生まれる
 昭和50年 千葉大学薬学部卒業
 昭和57年 旭川医科大学卒業
 平成 4年 医学博士取得
 平成10年 新十津川で医療法人和漢全人会花月クリニック開設

日本東洋医学会 専門医
 日本糖尿病学会 専門医
 日本内科学会 認定医
 日本内視鏡学会 認定医



医療法人和漢全人会
 花月クリニック
 日本東洋医学会専門医
 医学博士

辻
和之